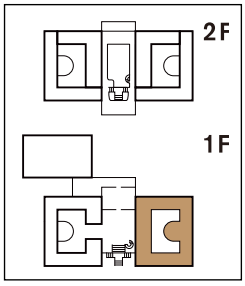
京都市京セラ美術館2023年度　展覧会情報

京都市美術館開館90周年記念展「竹内栖鳳（仮称）」

2023年10月7日（土）～12月3日（日）
前期 10月7日（土）～11月5日（日）
後期 11月7日（火）～12月3日（日）
本館 南回廊1F
主催：京都市ほか



京都市美術館の開館90周年を記念して開催する展覧会です。竹内栖鳳は、近代京都の日本画界に最も大きな影響を与えた画家です。画壇革新を目指した明治期には、旧習を脱却した新たな日本画表現を模索し、西洋にも渡りました。技術が円熟に達した大正・昭和期には、画壇の重鎮として、第一線で活躍しながら多くの弟子を育成したことでも知られています。「写生」を重要視しながら、抜群の筆力で生き生きとした作品を生み出し、圧倒的な求心力で画壇をリードして、近代京都日本画の礎を作りました。本展では、当館所蔵の重要文化財《絵になる最初》をはじめ、若手時代から円熟期まで、栖鳳の代表作を集めて展示し、一堂にその画業を振り返ります。栖鳳の挑戦をより明らかにするため、本画に加え、制作にまつわる写生や下絵、古画の模写など、様々な資料もあわせてご覧いただきます。栖鳳の奮闘を余すところなく振り返る、大規模回顧展です。

竹内栖鳳（たけうち・せいほう）
京都に生まれる。本名恒吉。 幸野楳嶺に師事し門下の四天王の一人に数えられる。1900年、パリ万博視察に渡欧した。文展開設当初から活躍、大正期には帝室技芸員、帝国芸術院会員となり、二度中国にも赴く。西洋画を含め諸派の表現を融合し京都日本画の近代化を牽引するとともに、写生にもとづく自然への視点、省筆の鮮やかさに独自の境地を拓いた。京都市立絵画専門学校、画塾竹杖会で多数の俊英を育てた。第1回文化勲章受章。

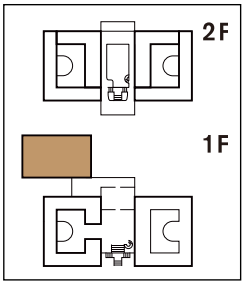
《絵になる最初》1913年　重要文化財
京都市美術館蔵

《潮沙永日》1922年
京都市美術館蔵

《清閑》1935年頃
京都市美術館蔵

京都市美術館開館90周年記念展「村上隆（仮称）」

2024年2月3日（土）～6月30日（日）
新館 東山キューブ
主催：京都市ほか

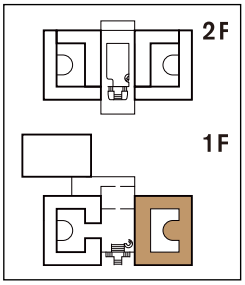


村上隆（1962年生まれ）は、マンガやアニメといったポピュラーカルチャー、ファッションアイコンなどの引用やそれらとのコラボレーションを通して、アートの価値や本質的な意味を問いかけてきました。そのキャリアは、欧米が事実上の規範となっている国際的なアート・シーンに、日本から独自の視点で挑み、刺激を与え続けてきた営みであると言えるでしょう。
東日本大震災の記憶も新しい2015年に開催された「村上隆の五百羅漢図展」（森美術館）では、世界の現代美術シーンでの地位を確立した村上が制作した、全長100ｍに及ぶ大作《五百羅漢図》を公開。生と死、鎮魂と祈りなどをテーマに、江戸絵画からも想を得て、改めて日本の伝統に向き合った成果となりました。
2023年度に90周年を迎える当館にて開催する本展は、国内で約8年ぶり、東京以外で初めての個展となり、京都とその歴史を参照した新作も構想されています。常に圧倒的な美的領域を構築してきた村上隆の世界にご期待ください。

Photo by Museum of Fine Arts, Boston
©Takashi Murakami/Kaikai Kiki Co., Ltd. All Rights Reserved.

村上隆（むらかみ・たかし）
1962年、東京都生まれ。1993年、東京藝術大学大学院美術研究科博士後期課程修了。2000年、伝統的日本美術とアニメ・マンガの平面性を接続し、日本社会の在り様にも言及した現代視覚文化の概念「スーパーフラット」を提唱した。2001年、自身が代表を務める有限会社カイカイキキを設立。2005年、「リトルボーイ展」（ジャパン・ソサエティ、ニューヨーク）にて、全米批評家連盟ベストキュレーション賞受賞。近年は、「Murakami by Murakami」（アストルップ・ファーンリ現代美術館、オスロ、2017年）、「The Octopus Eats Its Own Leg」（シカゴ現代美術館、2018年）を始め、モスクワ、ボストン、香港、サンパウロなど、世界各地で個展が開催されている。

コレクションルーム



当館のコレクションは、近代以降の京都の美術（日本画、洋画、彫刻、版画、工芸、書）を中心に現在約4,000点を数えます。なかでも明治期から昭和期の京都画壇の作品には、近代日本画を代表する名品が揃い、全国有数のコレクションとなっています。
この類まれなコレクションの魅力を通年でいつでも堪能していただくため、美術館リニューアル時に新設したコレクションルームでは、竹内栖鳳、上村松園など京都を代表する人気作家の名作紹介や、テーマをもうけた特集展示を通じて、京都美術の面白さをたっぷりと体感していただきます。

観覧料　一般※1京都市内在住の方：520円/京都市外在住の方：730円
　　小中高生等　京都市内在住の方：無料※2
　　京都市外在住の方：300円、小学生未満　無料

※1 京都市在住の70歳以上の方（敬老乗車証等の提示で確認）、障害者手帳等を提示の方およびその介護者1名は無料です。京都市キャンパス文化パートナーズ制度に登録している京都の大学に通学する学生の観覧料は100円です。
※2 京都市在住または通学の小学生・中学生・高校生・高等専門学校

春期 2023年3月10日（金）～6月18日（日）

特集「魅惑の昭和モダン」

明治から大正時代にかけて日本は欧米の先進国の影響によって工業化が進み、新たな文化の流入によって急速な近代化を果たします。特に人々の生活様式は都市部を中心に変化し、建築やインテリア、ファッションやライフスタイルにいたるまで、和洋折衷の独自性をもちながら昭和時代(戦前)に突入していきます。同時に官展における洋画、日本画の主題には同時代のモダンな風俗が積極的に描かれ、工芸においても欧米で流行していたアール・デコの影響を受けた作品が多く出現し、新時代の芸術として受容されていきました。本特集では当館が開館した1933年を含む昭和初期(1930年代頃)の絵画や工芸作品を中心に、当時の「モダン」を捉えた作品を紹介します。

その他展示予定：小企画「VOCA30周年記念展示」
絵画、写真など平面の領域で国際的な活躍が期待される若手作家の支援を目的に毎年開催される「VOCA展」の30周年を記念し、当館所蔵の関連作品を紹介します。

丹羽阿樹子《ゴルフ》昭和初期
京都市美術館蔵

徳力彦之助《双曲線的なるラヂオセット》1934年
京都市美術館蔵

夏期 2023年6月23日（金）～9月24日（日）

特集「人間国宝 稲垣稔次郎―遊び心に触れて―」

型絵染の重要無形文化財保持者であった稲垣稔次郎（1902-1963）は、伝統的な制作技法を踏襲し、その制約の中で意匠を凝らした作品を次々と生み出しました。吊（ツリ）（図柄同士や型枠と図柄の繋ぎ）を図柄の一部として巧みに取り込むなど、技術的な完成度の高さはもとより、制作過程で生じる染料の擦れや滲みなどの偶然性を取り入れたりするなど、作者の遊び心も感じ取れます。本特集では、寄贈を受けて新しく収蔵した稲垣の作品を中心に紹介します。そして、作者の卓越した個性的な表現とその遊び心を手がかりとして、型絵染の奥深さとその魅力の一端を紐解きます。

稲垣稔次郎《平家物語（ひよどり越え）[1]》1959年
京都市美術館蔵

稲垣稔次郎《[二匹の虎]》1955年頃
京都市美術館蔵

秋期2023年10月27日（金）～12月17日（日）

特集「Tardiologyへの道程」

野村仁（1945-）は、当館で開催された「美大作品展」で、ダンボールの板で組み上げられた高さ8メートルに及ぶ巨大な作品を発表しました。その構築物が、時間の経過とともに崩壊していく様子を撮影した写真が《Tardiology》として残り、その後の写真を用いた作風の原点となりますが、制作の発端には「モニュメンタルな永続性を第一義としない彫刻は可能か？」という彫刻的な問いがありました。本特集展示では、野村が師事した辻晋堂、堀内正和の作品を起点とし、戦後彫刻が歩んだTardiologyにいたる道程を紹介します。

※秋期のみ会場が本館北回廊1階に変更となります。

その他展示予定：小企画「京都市動物園開園120周年記念展示」
京都画壇をはじめ多くの作家が写生の場として通った京都市動物園の開園120周年を記念し、竹内栖鳳などの日本画を中心に動物を表した作品を紹介します。

野村仁《Tardiology》1968年　京都市美術館蔵

冬期　2023年12月22日（金）～2024年2月25日（日）

特集「昭和前期の日本画と古典」

大正期から昭和期に移り、日本画の表現は大きく変わりました。大正期では抒情的な表現が前面に出た、濃厚な色彩やぼかし、陰影を用いた作品が多く見られましたが、昭和になると、簡潔な線、平明な構図、抑制された色彩の、格調高い画風が流行します。

同時に、これら端正な画風を用いた主題としてよく見られたのが、日本や中国の歴史や古典文学、あるいは古典美術を意識したものです。猪飼嘯谷や窠本一洋、菊池契月をはじめ、京都画家の多くが歴史主題の作品を制作し、また一方で石崎光瑤や上村松篁は古典美術の学習を反映した作品を発表しています。本特集では、昭和前期の日本画を紹介し、その創造の源泉となった「古典」へのまなざしに迫ります。

窠本一洋《鵜》1936年
京都市美術館蔵

菊池契月《交歓》1938年
京都市美術館蔵

ザ・トライアングル

美術館のリニューアルを機に、新設されたスペース「ザ・トライアングル」（北西エントランス地下1階・観覧料無料）。新進作家の育成・支援の機会を創出するとともに、市民や観光客など来館者が気軽に現代美術に触れる場を提供しています。これまでに累計10人の京都ゆかりの新進作家による瑞々しく新たな感性を紹介してきました。2023年度は下記の3人のアーティストを紹介します。

米村優人（よねむら・ゆうと）｜2023年6月20日（火）～9月24日（日）

制作風景　撮影：岡はるか

米村優人は、主に彫刻を用いた空間構成をインスタレーション作品として発表してきました。米村は、多くの彫像が持つ男性性を強調するような「強さ」「立派さ」「崇高さ」ではなく、「弱さ」や「失敗」による「不完全さ」に注意を向けていると言います。そこにはごく個人的な物語と、痛みや畏れ、憧れとどうしようもなさなどの様々な感情が内包されています。人体彫刻のパーツは変形されバラバラに配置され、ギリシャ的な彫像が持つ荘厳な一者性は台無しとなり、崇高の念は雲散霧消します。それでも、自作の器具や作業台、身の回りのモノと共に構成されるインスタレーションからは、今の時代のリアリティが確かに伝わってきます。切実さを伴う試行錯誤の上で積み上げてきた米村による実験的な彫刻へのアプローチをご覧ください。

美術家。1996年大阪府生まれ。京都市在住。2019年、京都造形芸術大学（現 京都芸術大学）美術工芸学科総合造形コース卒業。近年の展覧会等に、屋外彫刻《AGARUMANS (Best Friend)》(グランフロント大阪、2021年)、個展「BARORORM SQUAD 1人でも立ってられるって！」（NEUTRAL、京都、2022年）、子ども向け企画「合体彫人アガルマン シールラリー」（「プレイ！シアター in Summer 2022」ロームシアター京都、2022年）、２人展「NSFS/止め処ないローレライ」（EUKARYOTE、東京、2023年）など。

山本雄教（やまもと・ゆうきょう）｜2023年10月13日（金）～2024年2月12日（月・祝）

《5874 円の芸術家》2022年

山本雄教は、日本画の研究を通して学んだ技法や素材を応用し、米粒の線描や、一円硬貨のフロッタージュといった小さなモノたちをモチーフや素材にした絵画作品、ブルーシートを支持体とするインスタレーションなどを制作してきました。山本は、「一枚の葉っぱが手に入ったら、宇宙全体が手に入るでしょう」という日本画の巨匠・安田靫彦の言葉に共鳴し、日常のどこにでもある些細なものが、実際は社会や世界、宇宙といったあらゆる大きなものとつながると考えます。そして、制作を通して、ミクロとマクロ双方の世界を行き来することを試みてきました。
本展では、これまでの山本の取組を紹介するとともに、京都画壇の歴史や、当館の収蔵品と関係した新作の発表も構想しています。

1988年京都府生まれ。2010年成安造形大学日本画クラス卒業。2013年京都造形芸術大学大学院修士課程ペインティング領域修了。京都市在住。一円硬貨やペニー硬貨を用いたフロッタージュによる絵画シリーズや、ブルーシートを支持体に伝統的な日本画のモチーフを描いた作品などを制作している。近年参加した主な個展に「〇〇〇〇円の芸術家」(至峰堂画廊、大阪、2022年)。主なグループ展に「市制90周年記念展　わたしたちの絵　時代の自画像」（平塚市美術館、2022年）、「第8回東山魁夷記念 日経日本画大賞展」(上野の森美術館、2021年)。「京都 日本画新展2020」京都市長賞受賞。

嶋春香（しま・はるか）｜2024年3月5日（火）～6月23日（日）

《Touch#圖版41》
2017年

嶋春香は、人と図像との関わりをテーマに、さまざまな時代や文化の道具が写った資料写真をモチーフに作品を制作してきました。最新作では1つの絵画の中に4つの図像を重ねて描く<Transformation>シリーズ（2022-）のほか、自身が日々消費する牛乳パックを支持体に、記録であり絵画でもある<蒐集>シリーズ（2019-）を継続しています。また、<Touch>シリーズは、一本の筆と一色の蛍光色で濃淡をつけて対象物を描き、資料写真という実際には触れることができないイメージに対し、描くことで可能となる「Touch（触れる、関わりを持つ）」という身体的な行為を通して理解を深めようとしています。また、蛍光色の発色の強さから「見たいのに見えない」といったアンビバレントな視覚作用を起こし、平面だけではなく立体作品としても展開。歴史・文化的資料を出発点としながらも、史実を裏付ける記録としての用途や文脈を読み取るのではなく、色、形、イメージから発せられる印象や個人の想像力を通しての対象物の理解を試みます。

1989 年北海道生まれ。2012年、京都造形芸術大学美術工芸学科洋画コース卒業。2014 年、京都市立芸術大学大学院美術研究科絵画専攻油画修了。現在、京都市在住。近年の主な個展に「洪水の跡と蒐集」（ギャラリー16、京都、2019 年）、「デラシネ」（VOU、京都、2018年）など。主なグループ展に「ベールの光景」（COCON KARASUMA 2F アトリウム、京都、2022年）など。「Kyoto Art for Tomorrow 2021－京都府新鋭選抜展－」毎日新聞社賞受賞。

「第10回日展京都展」

2023年12月23日（土）～2024年1月20日（土）
本館 北回廊1・2F、南回廊2F、光の広間
主催：第10回日展京都展実行委員会（京都市ほか）

日本最大規模の総合公募展「日展」の京都展。日本画、洋画、彫刻、工芸美術、書の5部門にわたって、全国を巡回する基本作品と京都・滋賀の作家による地元関係作品の計約500点をご覧いただけます。

お断り：上記の2023年度の展覧会の実施に係る予算については、2月市会において審議され、議決をもって確定することになります。また、新型コロナウイルス感染症の感染拡大状況等の社会情勢によっては、会期等が変更になる場合がありますので、あらかじめご了承ください。

広報お問い合わせ　　京都市京セラ美術館 広報
リリースに掲載の広報画像をご希望の方は
https://forms.gle/FtYMSgU7n6r8kV1E7 からお申し込みください。
TEL: 075-275-4271　E-mail: pr@kyoto-museum.jp

当館主催の展覧会以外の催し　*問い合わせ先は各広報事務局となります。

「生誕100年　回顧展　石本 正」
会期：2023年4月4日（火）～5月28日（日）
会場：本館 北回廊2階 http://www.sekisho-art-museum.jp/kaikoten/
主催：朝日新聞社、京都新聞、京都市

「マリー・ローランサンとモード」
会期：2023年4月16日（日）～6月11日（日）
会場：本館 北回廊1階　https://www.ktv.jp/event/marie/
主催：関西テレビ放送、産経新聞社、京都新聞、京都市

「ルーヴル美術館展 愛を描く」
会期：2023年6月27日（火）～9月24日（日）
会場：本館 北回廊1階・新館 東山キューブ　https://www.ntv.co.jp/love_louvre/
主催：ルーヴル美術館、読売テレビ、読売新聞社、キョードー、京都市

「井田幸昌展　Panta Rhei｜パンタ・レイ―世界が存在する限り」
会期：2023年9月30日（土）～12月3日（日）
会場：本館 南回廊2階　https://ida-2023.jp/
主催：京都新聞、京都市

「パリ ポンピドゥーセンター
キュビスム展―美の革命 ピカソ、ブラックからドローネー、シャガールへ」
会期：2024年3月20日（水・祝）～7月7日（日）
会場：本館 北回廊・南回廊1階
主催：ポンピドゥーセンター、日本経済新聞社、京都市ほか（予定）